

---

# 僕達は、とりあえず歩く。

天本幸治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕達は、とりあえず歩く。

### 【Nコード】

N2955W

### 【作者名】

天本幸治

### 【あらすじ】

「気が付いたら、ここに来るのが1番の楽しみになってたの。私を招待してくれてありがとう」

一筋の木漏れ日が彼女の頬を照らした。このかすかな光が、彼女の未来を照らし続けてくれればいいと僕は思った。いま彼女が幸せなら、その幸せがこの先ずっと続いてほしいと思った。そして、彼女の幸せな姿を、僕はいつまでも眺めていたいと思った。

ノベリスト・JPにも投稿しています。

## 第一章

季節が一巡りして僕は2年次へ進級した。この一年間、特に面白いことは無かったけれど、かといって嫌なことも無かった。普通とということだろう。

高校へ入学すると胸をときめかす素晴らしい日々が待っていて、輝き満ち溢れる青春時代が幕を開ける。なんて小説の冒頭文のような妄想は最初からしていなかった。だから、新しく始まった高校生活に失望したり、生きる気力を失ってしまったり、そんな事態には陥らなかつた。生きる気力はそもそもそんなにないんだけど。これまでの人生ただ成るように成るんだろうという感じで生きてきた。そして、これから先もその人生観は変わらないと考えていた。

基本はテキストに、ときたま集中して学校の授業を受け、夕方になつたら家に帰る。そして夕食までに宿題を終わらせる。間違つていようが途中の式が抜けていようが和訳が滅茶苦茶だろうが、もうなんだつていいから兎に角終わらせる。その後は、読むべき漫画や本を読み、音楽を聴いて、そして寝る。気が向けば近くの海岸まで走りに行く日もある。

時間が有り余る休みの日は、祖父が営業している酒屋でアルバイトをしたり、釣りに行ったり、本でも読みながらダラダラと過ごしたり、他にも色々やってるけど、何をやるにしても暇を持て余して一日をやり過ごしている。

このような感じで、僕は僕なりにささやかではあるが完結し、だが全くと言っていいほど刺激のない世界で、特別不満もなく、かといって大きな夢もなく生きていく。これが僕の高校生活であり、これが僕の青春時代だと思っていた。

春休みが終わって新学期が始まると、まず最初にクラス替えがある。僕のような私立文系コースの連中は大抵が8組か9組に配属されることになっている。ちなみに僕は9組だった。

「私立文系」なんて格好良く言ってみたが、成績が思わしくないと判断される我々のような人間は、三者面談を通じて半強制的に9組に組み込まれることになっている。数学なんて全く分からないから受験で使おうなんて考えていないし、そうなると必然的に理科も捨てることになってしまう。結局自分の居場所はここしかないのだから、自分はこのクラスで良かったと内心思っていた。私立文系の成績上位者が8組で、そうでもない者たちが9組へと配属される。

一年なんて速いもんだ。そんなことを思いながら、僕は体育館で始業式の時間を潰していた。残り二年間もあつという間なのだろうか。

体育館の天井を見上げると、一匹の小鳥が飛んでいた。開いている窓へと一直線に飛んで行き、小鳥は見えなくなった。しばらくすると戻って来るのだが、天井近くの鉄筋に一度留まったかと思うとまた直ぐに出て行く。始業式の間、小鳥は何度もそれを繰り返していた。朝学校へ行き、夕方家に帰る。起伏のない平凡な生活をしている僕に似ていると思った。そして、そんなことを考えることのない小鳥を、僕は少しだけ羨ましく感じた。

締めりのない式が終わると次はLHRの予定だった。教室の扉に張つてある紙を見て僕は自分の席を確認し、1番窓側、後ろから2番目の席に着いた。教室には1年次のクラスメイトで知り合いの者、なんとなく顔は知っている者、見たこともない者、色々いたがあまり興味がなかった。野球部か何かの連中が、黒板の前で騒いでいた。彼らは他の一般生徒を寄せ付けない独自の雰囲気醸し出し、天下を取ったような態度で騒ぎ仕切っている。

窓を開けると新鮮な風が髪を揺らした。わずかに残った桜の花がグラウンドに舞い、太陽の光は心地良く暖かった。眠気に駆られて、

僕はウトウトと夢現のままLHRが始まるのを待った。

しばらくするとLHRが始まった。担任の黒田先生は、まず簡単な自己紹介を済ませた。去年も僕らと同じ学年で担任をしていたので、話の半分くらいは知っていた。彼は地歴公民の担当で専攻は世界史、年齢は33だという。教員としては相応しくないボサボサの髪を触りながら、少し囁れた声で話した。色彩の薄い瞳と高い鼻が印象的な教師だ。

次に先生はクラスの役員決めを始めた。役員に立候補する者はいないか生徒に訊いたが、そんなものに自ら進んでなろうとする者なんているはずない。役員決めは行き詰ったが、真面目な生徒たちの善意で図書委員や風紀委員などはなんとか決定した。しかし肝心の中央委員が決まらない。どこか重々しい雰囲気の中、去年も同じクラスだった剣道部の伊藤巧が手を挙げた。

タクミは中学時代に県の代表として全国大会に出場した経験があり、多くの私立高校から特待入学の誘いを受けた実力者だ。この高校にもスポーツ推薦で入学している。

彼の印象は、なんというか、覇気がなく実力とは裏腹に体育会系の雰囲気ではなかった。身長は僕と変わらないくらいだが、筋肉質な体型で実際よりも大きく見えた。彼は彫が深く、無口なためいつも機嫌の悪そうな感じだった。だが、その口数の少ない性格も近寄り難い雰囲気も、タクミ自身が意図的に作り出しているようにも見えた。他人には見せることのない一面を無理やり隠しているような感じがあった。それを去年のクラスの連中も感じているかどうかは解らないが、彼は僕が無くした愛用のシャーペンを見つけて届けてくれる優しい奴だ、と知っているのはおそらく僕だけだろう。

彼にお互い信頼し合える親友がいるとしたら、その親友とはどのようなに接しているのだろうか、僕は思ったことがある。タクミも僕と似たように大概独りで行動していた。僕も大方単独で生活していたから、少数派同士で気が合うのかもしれないが、彼とは普通のクラスメイトといった関係だった。

タクミが中央委員に立候補するなんて意外だなと、僕は少し驚いた。しかし、彼は座ったまま早口でとんでもないことを言う。

「先生、中央委員は帰宅部の奴がするべきです。例えば山県交君とか」

僕は一瞬自分の名前を考えた。何故だか自分の名前が山県交ではないような気がした。次に同姓同名がこのクラスにいるんじゃないか考える。だが現実としてこのクラスにそんな同姓同名はいないし、そして、僕の名前は山県交だった。

一体どういっつもりなんだろう。全く面白くも何ともない冗談だ。僕はタクミを睨みつけた。彼は一瞬こつちを向くと、見たこともない笑みを浮かべて、また直ぐに視線を前になおした。新しいクラスメイトの殆んどが僕を知らないため、教室内は静まり返った。黒田先生は無精髭を撫でながら、名簿と席順を交互に確認し、僕の顔を見て言った。

「君がヤマガタマジル君、だよな？ やつてくれる？ 中央委員・・・」  
数人の生徒がニヤついた表情で僕を見ている。冷めた視線を浴びせてくる者もいる。こつちを見ないでほしい。というか何なんだこの状況は。

「あ、えつと・・・はい、嫌です」

結局、中央委員は演劇部の踊場という生徒が引き受けた。僕は心の底から踊場に感謝した。そしてタクミには強い嫌悪の情を抱いた。LHRが解散し放課後になったので、僕はタクミに文句を言っつてやろうと思った。だが彼は僕の気を察したかのように、早々と姿を消していた。何もかも読まれているような気がして、無性に腹立たしい気持ちになった。

昨日が締め切りの英語の課題が終わったので、提出してさっさと帰ろうと支度していた時だった。ふと、何処からかバタバタと音がしたかと思うと、息を切らせた黒田先生が教室に入ってきて来る。

「お、おおー、よかったよかった、まだ生徒いたよ」

先生は咳払いをしながらハアハア言っている。直感で碌な事になら

ないと感じた。

「・・・どうかしたんですか・・・？」

「いや、あのさ、配布物届け係つてのも決めなくちゃいけないよ。すっかり忘れてたんだよ。でも丁度良い、帰宅部で委員やってないのは山県と、あと15人くらいだからさ。頼むよ、配布物届け係。山県優しそうだし」

「ちょ、ちょっと待つてくださいよ、何ですか突然。別に決めるのは明日でもいいですよ。それに15人つて結構な数じゃないですか。勝手に話を進める先生に僕は反論したが、彼は聞く耳を持っていない。」

「でも明日また時間作って皆で決めるの面倒臭いよ。それに俺、あの堅苦しい雰囲気嫌いなんだよ。頼む、世界史の評定上げてやるから」

「いや、日本史です、自分。ホントそんなの知りませんよ。全然意味分かりませんって」

「じゃあ缶コーヒー奢るから、2本」

僕は一瞬言葉に窮した。

「はあ？・・・缶コーヒーで釣るって、俺って何なんですか・・・。あと、2本って」

滅茶苦茶だ。そもそも配布物届け係って何なんだ。女子は黒田の事を真面目で思いやりがある先生など言っていたが、これはどう説明すればいいのだろう。

「大体、配布物届け係って何ですか？去年はそんなのありませんでしたよ」

先生は眉間にしわを寄せ、突然真剣な表情になった。

「いや・・・実はさ・・・。この係りはウチのクラスにしかないんだ・・・」

彼は机に腰を下ろし、そして話し始めた。

今日は少し風が強い。透き通るような青空は一面同じ色をしてい

る。揺れている。水色の空に、木々が揺れている。幾重にも重なった枝が、ざわざわと身をよじるように揺れている。僕は窓を開けて外の空気を一度深く吸った。ゆっくりと息を吐き、そしてもう一度深呼吸をした。

### 大隈鏡。

キヨウという名の生徒がこのクラスにいる。だが彼女は今日学校に来ていない。もともと欠席が多く、三学期の出席率は相当悪かったらしい。今年は進級か留年かの瀬戸際だったという。去年は僕の隣のクラスだったというから、おそらく去年も黒田のクラスだろう。顔はおるか名前すら僕は聞いたことがない。その不登校少女キヨウの所へ学校からの配布物を届ける、それがこの係りの仕事なんですね。説明を少し聞いていつそう意味が解らなくなりました。そんなことを考えていると、「頼むから」と黒田が言ったような気がした。キヨウは、入学当初から精神的に不安定で入退院を繰り返し、一時的に良くなっても突然バランスを崩し学校へ通うことが出来なくなる。今は県立病院に入院していて、状態はよくわからないという。精神的問題が原因で入院と聞いて、僕は辟易した。身体が健康なら十分だと安易に決め付けている。精神状態なんて気持ちの持ちようだと。学校から五分程坂を下って歩いたところにその病院はある。登下校に通る道だから毎日その病院を目にするわけなのだが、そこにキヨウという生徒はいる。

聞く事全てが僕とは次元の異なる世界の話だ。鬱々とした気分になり僕は溜息をひとつ吐いた。

彼女と友達じゃないし、全くと言っていいほど何も知らない。知っているのは黒田に聞いた事だけ。クラスに彼女の友達はいないのだろうか。勉強やテストはどうしているのだろうか。幾つか疑問が浮かんだが、考えたってどうにもならなかった。週に一度、学校からの配布物を近くの病院まで持って行き彼女の部屋の前にあるポス

トに入れる。それが配布物届け係の仕事だった。

説明が終わったとき、黒田は完全に係りを僕に任せた様子だった。「わからない事があつたら何でも訊いてくれよ」などと真剣に言っていたが、無責任な行動を少しでも挽回するために言った虚偽の善意だと感じた。さらに黒田は「係りのこと人にべらべら言わないほうがいいぜ」などと言う。

最初に届けに行くのは明後日だから、それまでにキョウの友達がクラスにいないか女子生徒に訊いて、交代してくれないか頼もうと思つた。

放課後の校舎は静かどこかさむざむしい。廊下を歩いている生徒はいない。昼間は人間だらけで騒がしい校内も、突如として落ち着いた雰囲気になる。運動部の生徒の声が微かに耳に届く。僕の足音が、廊下の突き当りまで響き渡り跳ね返ってくる。

図書館から借りた本をカバンに入れようとしていると、サイドポケットに100円玉が入っているのを見つけた。下足に履き替え、ダラダラと自販機まで歩いた。コーラを買い、僕はグラウンドの端にある石段に腰を下ろして、何か考えるわけでもなく野球部の練習を眺めていた。泥だらけの練習着を着た部員たちが大声でボールを呼んでいた。

日は沈みかけ、風が少し肌寒くなった。しばらくの間ちびちびとコーラを飲んでいると、突然頭上で声がした。

「山県」

僕は上を向く。タクミが真上から顔を覗き込むようにして見ている。顔が近い。口の中では炭酸が暴れている。

「うっ！」

僕は驚きのあまりコーラを身体のおかしなところに入れてしまい、そして、口に含んでいた残りのコーラをタクミの顔面にぶちまけた。「うおおああ！」

タクミは悲鳴を上げて、自分の手で顔面のコーラを拭いている。そ

の光景はもう、なんと滑稽で、なんと残念なことか。

「あ、ご、ごめんタクミ、ウツ」

僕は、吹き出しそうになるのを何とか堪えて謝った。

「なに吐き出してんだよ！うわ、顔・・・ベタベタ・・・」

タクミは悲惨な表情で嘆いている。

「は、はやく顔洗って来いよ、きたねえなあ」

「おまえのдар！」

僕はもう笑いを堪えることが出来なかった。

タクミがタオルで顔を拭きながら帰ってきた。ところでタクミは僕に何の用だろう。そういえば今日、こいつは僕を中央委員に落とし入れようとしたな。それを謝りに来たとか。まあないだろう。タクミは僕の横に座った。

「で、何か用？」

「いや、特に」

タクミは、グラウンドに飛び交う野球ボールを目で追いながら、抑揚のない声で言った。茜色に染まった東の空に、一筋の飛行機雲がながれている。飛行機雲は、永遠に広がる大空を出し抜くように何処までも続いている。

「たったいま、剣道部を辞めてきた」

彼はこれ以上ないというくらいあっさりと言った。

「なんでまた？」

「これといって辞めた理由はない。ただ、続けていても意味ないように思えたから。部活なんて好きでするもんだろ。好きじゃないから、剣道」

タクミの表情はどこか清々しかった。

「ずいぶん急だな」

「辞めたのは急だけど、辞めようと急に考え付いたわけじゃない。

2年に上がったら辞めようと思っていた」

彼の声は落ち着いていた。

「そうか。でも好きでもないのに何故今までやってたんだ？」

「ガキの頃から親父に剣道ばっかやらされてさ。中学までは楽しかったんだよ。竹刀で相手をブツ叩いてさ。気持ちいいんだぜ、あれでも高校上がる頃から何故自分が剣道やってんのかとか考え始めてさ、そしたら訳が分からなくなった。こんなことやってたって意味ないじゃないかって。高校でどうするか考えたけど、今までずっと続けていた剣道を辞める勇気がなかったんだ。そして結局入部してダラダラと今まで続けてきたんだ」

「だから2年になったらもう辞めようと思ったのか」

「まあな」

「それって、カッコよく言ってるけど逃げてるだけだろう。考え直せば？」

僕が言うのと涙が出るほど説得力がない。僕だって陸上をやめているんだから。

「うるせえよ」

「おまえ、結構強かったんじゃないの？」

「まあ、そこそこ。でもそんなもん関係ない」

タクミは少しも辞めることに迷いはなかったようだ。しかし、幼い頃から剣道をやり続けて中学では全国大会にも出場している。それ程剣道に力を入れていたのに、何かしら気持ちの変化はあったにせよ辞めようとまでするものだろうか。タクミは剣道に未練はなく、完全に吹っ切れているような様子だった。

彼の表情から僕は何かを見出そうとした。しかしタクミの心境は伺い知れなかった。残り少ないコーラを一口飲んで、タクミに訊いた。

「これから何かやりたいこととかあんの？」

「ないよ。まあ少しくらい勉強しないといかんなあ……。勉強の出来ない帰宅部。あ、これ山県のことだ」

「あー、否定できないってつらいね……。でも、なんか勿体無い気もするな、辞めたのは」

すると、それまで遠くを見るような目で話していたタクミが、ふと僕の目を見て怪訝そうな表情で言った。

「マジルだって中学の頃はなかなか出来たんだろ？陸上。桂さんから聞いたぜ。高校でもすればよかったじゃないか」

タクミは「桂さん」のところにアクセントをつけて言った。そして僕のことを「山県」ではなく「交」と呼んだ。悪い気はしなかった。「いや、そんなに好きじゃないから」

「だろ？お互い様だよ。好きじゃないなら部活なんてする意味無いさ・・・でもおまえ、さつきと言ってること違うぞ？」

タクミはだらしなく両足を伸ばして仰向けになった。一度大きく、深く深呼吸をした。

力があつたつて、才能があつたつて、好きじゃないのなら意味がないのだろうか。今の僕には、これといってやりたい事もないし、熱中していることもない。だからこうやって、毎日毎日ダラダラと生きている。いいことだとは思わないけど、だからといって悪いことをしているわけでもない。こうやって過ごしているのが今の僕だという事、ただそれだけのことであって、そこには善も悪も存在しない。ならば空虚で平凡な日々であっても、それならそれで構わないのか。タクミは構わないんだらう。

現実の世界は映画や小説みたいに心が躍るようなことなんてないし、感動することも絶望することも、そうあるもんじゃない。突き詰めて考えると、僕が生きている今のこの日常の姿が、僕の今のこの現状の姿が、あたりまえの当然の形なんだと思う。当然だからこそ、この現実に失望したり、もっと刺激を求めたり、そんなことはしない。求めているから、今の自分や今の世界を享受することができる。

「そういえば今日、おまえ、俺に中央委員させようとしただろ。どういうつもりだよ？」

しばらく目をつぶっているタクミに僕は訊いた。もうどうでもいいことだったが、なんとなく訊いてみた。今日一日のなかで印象に残

っていることといえば、これと配布物届け係の件くらいだったから。タクミは遠い昔を思い出すかのように言う。

「ああ・・・そんなことあったな。なんでだろ、忘れた。・・・ついカッとなつてしまつて、気が付いたら主人が目の前で死んでいました。はい、殺すつもりはありませんでした。みたいな？」

「あー・・・、つまんねー・・・。とんでもないことになるところだったぞ。というか、おまえだつて帰宅部じゃないか・・・」

そうだ。中央委員は帰宅部の奴がするべきです、なんて言っていたがタクミだつてもう帰宅部じゃないか・・・。

「俺、あの時はまだ剣道部でした。先程、帰宅部になりました」

タクミはニヤニヤしながら言った。

「はは、くだらねー」

「まあ、悪かつたよ。窓側を見るとおまえが眠そつな顔してたから。ジョークだよジョーク」

「なかなか笑えないジョークだよ」

去年一年間、タクミとは同じクラスだったけど、こんな風に話したことはなかった。なんというか、もつとおとなしい奴だと考えていたが、意外と明るい性格で案外面白い奴だと僕は思った。

グラウンドから練習で使い古されたボールがコロコロと転がって来た。タクミは立ち上がると、制服のズボンについている砂を掃つて石段を降りた。球拾いの1年生が囁れた声で何か言いながらこつちへ来ている。タクミはボールを拾うと足を上げて力一杯投げた。野球のことはよく解らないけど、それはしなやかなフォームだった。ボールは1年生の遙か頭上を越えて綺麗な放物線を描き、ダイヤモンドへ届いた。タクミはしばらくそのボールを眺めていた。重そうな足取りで石段の上に戻り、肘が痛いと言つて、残り少なくなつた僕のコーラを一気に飲み干した。そして呟いた。

「温いな。しかも炭酸が抜けてる」

僕はひとつ欠伸をした。配布物届け係のことが胸に突っ掛かっている。

変わってくれる女子がいるのか不安だった。自分は無責任な人間だと思った。タクミの制服は左脇の部分がほんの少しだけ破れていた。投げたときに破れたんだろう。

6時のチャイムが鳴った。放課後に鳴るチャイムの音は普通よりも大きく聞こえた。僕はふと下を向いた。長く伸びた二人の影が、僕らの姿を映していた。

それから僕達は、空っぽの校舎の後ろで、質の悪いグラウンドの前で、なぜか心地よい石段の上で、放課後の時間をだらしなく過ごした。まだ帰らないのかと、しばらく時間が経ってタクミが言うまで僕らは何も話さなかった。

高校の最寄り駅で電車を降り、気の失せるような坂をゆっくり歩く。

昨日、学校から帰り夕食を済ますと僕はコーヒーを飲みながら、配布物届け係のことと、キョウという不登校少女のことを考えた。週に一度、溜まった学校からの配布物を届ける。何とか委員なんかと比べると仕事内容は随分ラクなんだけど、見たこともない少女に持つていくというのは億劫だ。会う必要はないのだがやりたくない。大体そういう大事な配布物を一般生徒に任してはいけないんじゃないのか。担任の黒田は「大丈夫、大事なものは俺が直接持つていくから。週に一回チャチャッと届けるだけだから」なんて言うていたが、大事じゃない配布物もおまえが持つて行けと言いたい。というか、そもそも配布物に大事も大事じゃないもないだろう。

いま気づいたけど今日は木曜だから、このままだと最初の配達は明日じゃないか。

一人でそんなことを考え歩いていると、誰かが後ろから僕の名前を呼んだ。

「マジル、おはよう」

振り返ると桂幾乃がいた。イクノはいつも朝からハイテンションだ。そのエネルギーを少し分けてほしい。僕は、自分が難しそうな顔をしていることに気づき表情を和らげた。

彼女は中学1年の秋、僕がいた中学に転校してきた。父親の仕事の関係で幼い頃から転校が多く、九州や北海道に住んでいたこともあるらしい。しかし父親が、転校ばかりしていたら娘がかわいそうだと言って、4年前に僕の家の中ぐ近くに家を建てた。イクノの父親はいま単身赴任で働いているらしい。自分は家族が離れ離れになるのは嫌だった、と以前イクノは僕に話したことがある。でも、僕が住む街に来て長く付き合える友達が出来たのは嬉しかったとも言っていた。それまでは長くても1年くらいだったから、と。中学2年3年と同じクラスで、家が近かったこともあり、僕とイクノは仲が良かった。僕には女の子の友達なんて殆んどいないから、イクノと仲が良いというのは喜ばしいことだ。高校ではずっと別々のクラスだけど、勉強でわからないところを教えてもらったり、宿題を見せてもらったり（これは本当に助かる）、結構協力してもらっている。そのかわり、彼女は美術部に入っているため、僕は大事な休日などに県立美術館なんかへ連れて行かれることもある。

イクノは色白で亜麻色の髪がよく似合っている。髪を結ぶのが好きじゃないと言い、結ばなくても風紀検査で引つかからないミディアムヘアにしている。それならいいのかと聞いたら、ギリギリ大丈夫だと言っていた。女子の中では比較的長身の方で、奥二重の目は大きく見える。多分、美人の部類に入るんだろう。性格も明るく男子からモテているようだけど、イクノは誰とも付き合うつもりはないらしい。

何気ない話をしながら歩いていると、イクノが聞いた。

「クラス替え、どうだった？」

「普通。俺とイクノ、同じ文系なのに全然一緒のクラスならいよな」

「私はマジルと違って勉強できるからね」

イクノは笑いながら嫌味つたらしく言った。彼女は今年8組だった。「ちがうよ。勉強できる奴が8組なんじゃなくて、ただ勉強できない奴が9組に来るだけなんだよ。だからイクノが頭良いわけではないんだぜ」

僕が自信満々で言うと、イクノはまた笑いながら言った。

「マジル、自分で勉強できないって認めてるよ」

「ああ・・・確かに」

「大丈夫。少しくらい私が教えてあげるから。それにマジルが勉強できなくなつて、誰も悲しまないよ」

「いや、俺が悲しいよ・・・」

「そういえば、去年も隣のクラスだったね」

去年も隣のクラス・・・。その言葉で思い出した。黒田が昨日言っていた。大隈鏡は去年確か僕の隣のクラスだった。ひよつとしたらイクノは何か知っているかもしれない。そう思ったが、どうせ今日誰かクラスの女子に頼んで変わってもらつつもりだから別にいいか、と思って訊かなかった。

「ああ」僕はそう言っただけだった。

「新しいクラスに可愛い女の子はいるの？確か、私と同じクラスだった東条さんとか高橋さんとか今年は9組でしょ？」

「あ、そうなんだ。知らなかった。あと、高橋さんが誰だかわからん」

「えー？あの人たち、男子から人気あるんだよ？相変わらずマジルは女の子に興味がないんだね」

「どうなんだろう」

「幣原さんとは仲良かったね。短い間だったけど」

イクノはからかうように言った。今まで幾度となく聞かされた言葉だ。

「おまえいつまでも覚えてるよな、そんなこと」

「覚えてるよ」

僕は中学の頃、幣原ルカという子と一時期付き合っていた。その

頃は、自分はルカの方が好きなんだと思っていた。でもそれは、異性に興味を持ったあの頃の浅はかな感情だった。ふたりで遊びに行ったり、勉強したり、実際楽しかった。一緒にいて楽しい。ただそれだけのことが、すなわち好きという事なんだと思っていた。

あるときルカが、同じ学年の男子に告白されたと言ってきた。僕はルカと別れたくなかった。でもルカがその男子と付き合いたいと思うのならそうすればいい。僕はそれを拒む権利はない。決めるのはルカだと言った。そう言うところルカは涙を流して、酷いと言った。マジルは私と別れてもいいのか、そうだ私のことを好きじゃないんだ、と言った。私と付き合っていたいからその男子をフツてくれと、必死になってそう言うと言っていたのに、と。僕はルカを好きだと思っていた。好きだからこそ僕の意見を押し付けるのはよくない、彼女自身が決めるべきだと考えた。好きだからこそ彼女がその男子と付き合いたいと思うのなら、僕はそれを拒まずに受け入れなければならぬと考えた。

好きになるとはどういうことか。その人の気持ちを何よりも最優先に考え尊重することなんじゃないのか。相手を独占して、好きだからという名目で束縛することが愛の形じゃない。付き合うということは片方の意思だけで成立するものじゃないし、自明のことだけど、お互いが相手のことを思わなければ成立しない。一度実ったとしても、その交際は絶対的ではなく、何時壊れてしまっかわからない、不確かだ軟弱なものだ。だから僕はそれを壊さないように、ルカの気持ちを大切にしようとした。自分の本心をあからさまに曝け出すのは良くないし、相手に自分の思いを強要してはいけないと思っただから。

こういう考え方がルカとの別れを導いた。僕は混乱した。なぜなら僕の思いを強要していれば、ルカと別離を回避することができていたのだから。皮肉なものだ。目に見えない拳銃で、心の中を何発も打たれたようだった。その波紋は微弱ながらも、今も僕の胸に残存している気がする。

ここにきて僕は、支離滅裂だけど、最初からルカのことを好きじゃなかったという結論にたどり着いた。いや違う。無理矢理考えるようにした。本当に好きなら、どんな正論も奇麗事も投げ捨てて、なにがなんでも、別れずに済む手段を見つけ出し実行するだろうと考えるようになったから。道徳だとか倫理だとか関係なく、どうすれば彼女と別れずに済むのか一心不乱になって方法を模索するだろうと。ところが僕はそれをしなかった。これはすなわち僕がルカを好きじゃなかった証拠だ。こういう論理で僕は以前までの考えをねじ曲げた。

だけどその一方で、そういう身勝手な行動や思想は、僕の中ではどうしても愛とイコールの関係で結ばれなかった。

相手を尊重する。極論としては自分自身よりも相手のことを大切に  
にする。

相手が望む如何なることも受け入れる。だから相手が自分から離れようと思つのなら、好きであるが故に拒まない。これは愛していることの何よりももの証明だと思つ。はたまた対照的に、相手に対する独占欲に駆られて一人占めにしたいと考える。これもまた、好きであるが故に湧き上がる衝動だと思えなくもない。

はたしてどうという考え方が愛情の形なのか、様々な考えを展開したけど、僕には畢竟解らない。愛するとは一体どうということなのか、あらゆる主張が頭の中でぐるぐる渦巻き、そこからは何も見出せない。それは時が経つた今でも同じことだし、こういうことを考え出して以来、僕は女の子に対してなんとなく消極的になつてしまった。後になつて解つたことなのだが、ルカは告白なんてされてなかった。イクノが教えてくれたのだが、これを聞いてそれまであったルカへの罪悪感は殆んど払拭された。ルカは僕の気持ちを知りたくなつたのか疑つていたのか、嘘をついて探りを入れた。予想していたか想定外だったかは、ここまできると全く見当も付かないが、僕がルカ自身で決めるなんて言つたのは相当ショックだっただろう。彼女を傷つけたことは悪いと思つているけれど、騙されたと知つたと

きは僕だつて結構辛かった。お互いにとって良いことなんてひとつもなかった。

だけどこの経験が愛の概念というか、そういうものについて自分なりに考える切っ掛けとなった。しかし考えるだけで、答えと言えるものは出てこない。深い霧の中からぼんやり何か出てきたと思つても、一度瞬きをすると刹那に消えてなくなる。あるいは古びたホコリくさい部屋の中にいる。愛情という名の彫刻像を創作するために僕は強い力で彫刻刀を握っている。しかし、握っているだけで彫ろうとはしない。誤つて刃の部分に手が触れてしまい、生温かい血が滴り落ちる。床に落ちた自分の血を眺めながら僕は悩み続ける。どこから彫ればいいかわからない。何を彫ればいいのかわからない。完成像を想像する事が全く出来ない。だから彫ることができないのだ。

それにしてもこの坂は長い。希望坂なんて名前は詐欺だ。最寄の遠宮駅から媛城高校まで、10分程この坂を歩かなければならない。駅から高校を通るバスがあるのだが、徒歩10分というのは大した距離ではないし、乗るなら電車を1本早くしなければ遅刻してしまう。だから多くの生徒が駅から歩いて登校するのだが、疲れない生徒は多分ないだろう。自転車通学の生徒なんて死にそうな顔をしている。そのかわり下校は自転車に乗っているだけでいい。歩いている僕たちの横を猛スピードで通り過ぎる。衝突したら大怪我するだろう。以前、自転車通学の生徒と一般の人が衝突して双方ともに酷い傷を負つたと、全校集会で何かで教頭が言っていた。だからブレーキを掛けながら乗るようにと。

イクノは最近学校前で開店したケーキ屋のシュークリームについて熱弁している。

「だから今日帰りに寄つて行こうよ」

僕はテキストに相槌を打った。何気なく右斜め前を見ると「県立遠宮病院」と書かれた看板が目についた。クラスの中で誰が配布物届

け係を引き受けてくれそうか考えた。しかしそれ以前に、クラスの女子を殆んど思い浮かべることが出来なかった。

「ね、ねえマジル！聞いてる？」

「あ、ああ、聞いてるよ。で、シュークリームが何だった？」

「・・・何言ってるのよ！私は今おじいちゃんの話をしてるの！」

「うん・・・」

その日、僕は昼休みまでに3人の女子に頼んでみた。だけど皆引き受けてくれなかった。そりゃそうだ、僕が逆の立場だったら引き受けない。でも、あんな拒み方しなくてもいいだろうに。3人もも断るときに「絶対」を付ける。そんなに嫌なのだろうか。優しそうな雰囲気の子の頼んでみたのだが駄目だった。僕は諦めかけていた。自分の席で弁当を食っていると、生活委員の田中さんが話し掛けてきた。

「ねえ山県君、後で生活委員の会議みたいなのがあるんだけど、同じ生活委員の羽山君、今日欠席なの・・・。私一人じゃ聞き落としたりしそうで不安だから、よかつたら一緒に来てくれない？」  
普段なら行っても構わないが、あいにく僕は、配布物届け係を引き受けてくれる勇士を探すという仕事がある。

「ごめん、俺、昨日黒田に配布物届け係とかいうの任されてさ、これから変わってくれそうな女子探さなきゃいけないんだよね」  
それまで笑顔だった田中さんが驚愕の表情を浮かべた。その変容ぶりに僕も驚き、田中さんを瞳を凝視して3度ほど瞬きをした。さっきの3人といい、うすうす感じてはいたが、どうやら僕は厄介な仕事を扱うことになっているようだ。

「山県君、病院係になっちゃったんだ・・・。それ誰も変わってくれないよ。私、大隈さんと同じクラスだったんだけど、私・・・病院係だったの」

僕は誰かに係りを交代してもらい、さっさと身を引きたかった。だが同時に心の片隅で、学校に来ないキョウウについて何か知りたい

と思っていた。それは係りである以上最低限知っておきたいという思いから来る感情ではない。純粹にキヨウがどんな人間なのか、なぜ学校に来ないのか、精神的に問題があるというが原因は何なのか、僕にはそういう踏み入った疑問があり、答えを知りたいと思っていたのだ。でもキヨウに好奇心を持つ自分が気に食わなかった。実際、週に一度だけ学校帰りに届けに行くなんて簡単なことだ。しかし僕は、与えられようとしている任務の程度に見合わぬ拒否の意思を心中から発していた。何故か。認めるのが嫌だったからだ。何ひとつ知るところのないキヨウに対して、あれこれ想像を膨らまし、自分で勝手にキヨウを詮索している自分を認めたくない。理由は解らないが、キヨウへの関心は強い。だから、その関心を上回る無関心の意思を意識的に捻出しなければならぬ。少しでもキヨウに関わってしまうと、堤防を突き破る洪水の如くキヨウの真相の探求に心酔してしまいそうな気がしていた。これが係りを拒む理由だ。何故興味深いかわからない。最近は探究心を擲る出来事が起きないからだろうか。

目の前にいる田中さんに何と言おうか迷っているつもりだった。

「へえ、そうなんだ。じゃあ仕方ないから諦めて俺がするよ。それじゃ、これから別の用事あるから」と言い、何も知らないままにするか、それとも「へえ、そうなんだ。それで、どんなのだったの?」と言い、詳しく聞くか。しかし、迷っているつもりでいながら田中さんに訊いていた。言い終わる頃に発言を修正しようとして滅茶苦茶になった。

「そうだったの?じゃあ、大隈鏡のこと何か別の用事・・・あるから」

「・・・え・・・?」

田中さんは優しく微笑んだ。

「いや、田中さん大隈鏡のこと何か知ってる?」

知ってるよ。そう言うとな彼女はキヨウについて話し始めた。彼女との会話(僕は殆んど喋ってないけど)がどのくらい長かったか解ら

ない。人の話をあれほど集中して聞いたのは久しぶりだった。

「3ヶ月くらい前なんだけど。三学期初日の放課後、教室に残って少し勉強してたんだよね。あ、冬休みの宿題じゃなくて予習だから。そしたら黒田先生がバタバタ教室に入ってきて、私に頼みたい仕事があるって言うの。今日のLHRで配布物届け係を決めてなかったから田中やってくれ、って。困った先生でしょ？仕事内容は多分山県君と同じよ。大隈さんって一学期は結構学校来てただけど二期で休みがちになって、とうとう三学期は入院までしたの。なんか精神的にヤバイらしいよ。元々暗い感じで静かな子だった。なんか近づきにくい感じだった。てゆうか、あれだけ欠席してよく進級出来たよね」

「ねえ、聞いてる？そう田中さんが言うので、僕は聞いてると言った。「これは、噂で聞いたんだけどね・・・大隈さん中学の頃、両親が死んだんだって。大隈さんを独り残して。今はおじいさんにお世話になってるらしいけど」

突然背中を叩かれた思いだった。田中さんは淡々と話す。唇の動きが見ていると、そこから声が出ていないような妙な感覚だった。

「大隈さんの問題って、絶対両親にあるのよね。私、初めて配布物届けに行った時、大隈さんの部屋を覗いて見たの。どんな様子かなーって。見た目だけなら普通だった。暗かったけど、それは元々だから。でも大隈さんが話すことは死に関連することばかり。あなたも生きてて楽しいかとか、自殺しようと思ったことはないか、とか。あれは重症よ。私、何言っても意味無い気がしたわ。私何か言って慰められるような状態じゃなかった。てか両親死んでのに簡単に慰めの言葉とか言えないって」

入院してるくらいだからそれなりに事情があつて、なにかしらの問題もあるんだろうと思っていた。しかし、田中さんが発する言葉ははるかに想像以上だった。

「次の週は友達連れて行ったんだけど、もう関わりたくないと思っ

たわ。人はいつ死ぬかわからない、あなたたちも今日死ぬかもしれない。だから常に覚悟してたほうがいい。なんて真面目に言ったのよ。未来が見えるような深刻な顔して。他にもいろいろ言ってたよ。なんかもう、こっちまで鬱状態になりそう、それ以来病室に入ってないわ。病院係として届けるだけ」

「大隈は三学期何回くらい学校来たの？」

「知らないけど、来たとしても保健室登校でしょ」

「保健室……。友達とかいないの？」

「さあ。クラスにはいないんじゃないの。自分から避けてる感じあったし、あんなこと言ったらできないよ」

「じゃあクラスの女子も避けてるんだ」

「避けてるっていうか忘れてるんじゃないの？憶えてるとしても関わりたいと思わないでしょうね」

「関わりたいと思わないのは田中さんが色々言いふらすからじゃないのか。僕が女子に断られたのは彼女の話が影響しているんだろう。」

「大隈さんって大変な事情抱えてるんだね」

「噂もあるから本当の事は私もよく知らないんだけどね」

「でも信憑性高いみたいだね」

「そう、ね」

「そっか。まあ教えてくれてありがとう」

階段を上り、屋上に出る扉を開けた。生暖かい風が心地よかった。ヒビだらけのアスファルトの上で、僕は田中さんの話をゆっくりと思いつく。

キョウウについて知りたいと思っていたのに、いざ聞き終わると心にぽっかり穴が開いたような気持ちになった。内容が重過ぎて、しかも真実と嘘が混同してややこしくなっている。言えることは、そう簡単な実状ではないということ。噂が本当なら両親の死というは残酷だ。独りこの世に取り残された彼女は何かを感じ、その経験から現在にかけてどう変わったのだろう。彼女は今でも引きずっているに違いない。どうでもいいことだが、僕の任された係りは去年のク

ラスでは病院係と呼ばれていたらしい。重要なことはキヨウの現状、そして黒田のおこなった確信的かつ計画的犯行だ。

昨日の放課後、誰もいないはずの教室に黒田は息を切らせながら走って来た。決めるのを忘れていた係りがあると言い、僕にそれをしてくれるよう半ば強引に懇願した。不登校の生徒がいるから配布物を届けてほしい。

これは三学期初日の田中さんと全く同じだ。LHRで黒田はわざとこの係りを決めないようにしていた。昨日の放課後、僕が教室にいたのは偶然だった。ということは、係りは誰だっというが、大勢のクラスメイトがいる中では、配布物届け係という名を口にしたくないということだ。忘れていたと言う黒田の言葉を微塵たりとも疑っていなかった僕は、黒田の一連の行動に困惑した。

放課後、僕は坂を下り媛城病院へと向かう。カバンの中には配布された媛城新聞や保険便りなどがある。僕自身貰ったことを忘れていたようなものばかりだった。駐車を抜けると出入口があった。受付で精神科をたずねると、二階上がり廊下を真直ぐ進み、西病棟の表示のある十字路で左に曲がればキヨウのいる233号室付近に着くという。こちらの素性と目的を述べると、すんなり通ることが出来た。病院内は消毒液の匂いがした。廊下は閑散としていている。言われたとおり歩いて行くと、  
「231〜250」

という表示が天井からぶら下がっていた。233号室は十字路を左に曲がって二つ目の病室だった。番号の下には丁寧な字で「大隈鏡」と書いてある。二人部屋のようだが、大隈鏡と書かれた札の下には何も書かれていない。いま233号室に入院しているのはキヨウだけなのだろう。入り口の横には黒田が言っていたポストらしきものが掛けられてある。ブルーの半透明でプラスチック製だった。何か入っていれば一目でわかる。配布物にあれば看護婦さんが室内へ持って行く仕組みなのだろうか。僕は渡されたプリント類をカバンから取り出しポストに入れた。

僕の仕事は終わった。だけど足は動こうとしなかった。扉を隔て

て大隈鏡がいる。いま彼女は何をしているんだろう。彼女に会ってみたいという衝動が、自分も認知していなかった心の奥深い狭間から湧き上がっていた。目の前のポストと病室の扉を交互に見ながら、これから僕がしようとしている行動に自分自身驚いていた。心拍数が上がっているのがわかった。少し緊張しているようだ。若干汗ばんだ手を軽く握り、僕は233号室の扉をノックした。

「誰？」

彼女がか細い声でそう言ったのは、僕がノックして数秒後だった。殆んど突発的にドアを叩いたため、言葉を何も用意していなかった。僕は、ごくりと息を呑んだ。

「あの・・・配布物を届けに来ただけど・・・」

そうは言ったものの、プリント類は既にポストに入れてある。

「そう、入っていいよ」

彼女はドア越しに言った。冷静な声は高くもなく低くもなく、綺麗だった。僕はいま入れたばかりの媛城新聞や保険便りをポストから静かに取り出し、そっとドアを開ける。

半分ほど開けたところで僕とキョウの、ふたりの目が合った。二重瞼の瞳は活気がなく、どこか焦点の合っていないような感じだ。彼女は淡いブルーのパジャマを着てベッドに腰掛けている。布団は丁寧にたたまれベッドの隅に置かれている。キョウは薄い毛布で足を覆っていた。室内は薄暗い廊下とは対照的に明るく、暖かい太陽の光が差し込んでいる。テーブルの上にはスイートピーが置いてあり、横には洗面台と鏡がある。カーテンもシーツも、壁も床も天井も白い。病室独特の殺風景な部屋だった。窓が開いており、外から吹き込む春の風にキョウの黒髪が靡く。長く黒光る髪が彼女の顔にやさしく触れる。美人だと思った。端正な顔立ちで肌は透き通るほど白い。まるで彼女は病室と一体化しているかのようだ。しかし、その白さは健康的でない気がした。清楚な顔つきは穏やかであるが、一方で筋の通った賢そうな印象だった。僕はドアを閉め、配布物を片手に言った。

「あの、これ学校から貰ったやつなんだけど・・・」

「そう、ありがとう。ポストがあるんだけど、見えなかった？」

キヨウは小さく優しい声で僕に訊いた。キヨウが言った言葉は僕にとって最も返答に困る質問だ。知っていましたがあなたがどんな人なのか興味があつたのです、なんて言えない。僕は精一杯取り繕つて、知りませんでした、みたいな演技を出来る限りしようとした。しかし、あんなに分かり易いポストを見落とすはずがない。だから初めからポストのことは聞いてないということにした。でも、おそらく彼女は僕の嘘を見抜いていたと思う。

「ポスト？・・・もしかして、ドアの横に掛けてある青い入れ物のこと？」

キヨウの口元が少しだけ緩んだ。彼女は目を細めて窓の外を眺めた。キヨウに促されるように僕も見る。空には郡を成したひつじ雲が広がっていた。雲は全く動いていないように見る。それはずっと前からあり、そしてこれからも同じ場所に留まり続けるんじゃないかと思われるほどだった。

「ねえ、どうしてあなたはこの係りになったの？」

外を見たまま彼女は言った。予想外の質問だった。何と応えようか迷つたのだが正直に言うことにした。

「黒田先生に頼まれたんだ。俺、部活してないから」

「そう、わざわざ病院までごめんね」

田中さんの説明とはえらい違いである。彼女の言っていたような雰囲気や態度ではなかった。しかし、噂が本当ならば、キヨウは耐え難い苦しみを心に抱いている。キヨウはその苦しみを必死で押さえ込んでいるのかもしれない。

「いや、帰り道だから」

「嫌だつたら、届けなくて捨ててもいいよ。大事な配布物は黒田先生が持つて来てくれるから」

キヨウは柔らかい口調で言った。本来なら、これは願ってもないことだ。しかし、僕はあれほど係りを変わってほしいとクラスメイト

に頼んでいたにもかかわらず、今さらキヨウの言葉を受け入れるのは気が引けた。一度届けに来て彼女と顔を合わせたのだから、もう後には引けない。

「嫌じゃないよ。週に一回だけだし」

「そう、ありがとう」

彼女は窓の外を眺めている。この病室からは、遠宮の街が一望できる。日は少しずつ傾き始めていた。キヨウは立ち上がり、一箇所だけ開いていた窓を閉めた。僕はそのとき、彼女がすごく華奢なことに気づいた。顔には出ていないけれど、キヨウはかなり痩せていた。外の騒音が聞こえない室内は重々しく感じた。キヨウが病室でどのように過ごしているのか、推察出来るようなものはひとつもない。この狭い部屋で一体何をするんだろう。学校へ通わず、ただ時間が過ぎるのを待っているのか。訊きたいことはあるけれど、勇気はなかった。来週勇気があれば、そのとき少し訊いてみよう。

「それじゃあ、帰るよ」

キヨウはこちらを見て僅かに微笑んだ。殆んど無表情といってよかったが、口元だけが、ほんの少しだけ微笑んでいた。同時に僕は、それが精一杯取り繕った作り笑顔だということを理解した。

僕は病室を出て薄暗い廊下に出た。時計を見て気づいたが、僕はキヨウの病室に15分ほどいたようだ。たかだか数分ほどだと思っていた。これから日は沈み夜になる。キヨウはあの寂しい病室で、たった一人で時間をやり過ごすのだろう。彼女は一体何を希望に生きているんだろう。希望なんていうと大袈裟だけど、人は誰だつて何かしら小さな楽しみを持って生活しているものだろう。しかし、キヨウにはそのようなものが見受けられない。かといって、噂に聞いていたような少女でもなかった。

二度目に配布物を届けに行ったとき、ドアをノックしても返事はなかった。僕は仕方なくポストにプリント類を入れて帰った。三度目に訪れたとき、返事したのはキヨウではなかった。静かにドアを開けると、病室には看護婦がいた。ベッドから少し離れたところ

で、看護婦は診察シートに何かを書き込んでいた。キヨウは眠っていた。僕は看護婦にキヨウと同じクラスであることや、係りのことを話した。看護婦は愛想良く相槌を打っていた。しかし看護婦はキヨウのことを何も話さなかった。僕はキヨウについて訊きたいことがあったのだけど、看護婦が自分から何も言わないので訊かなかった。眠っているキヨウが起きるいけないので、僕は看護婦にプリントを渡して病室を出た。心が不安定になると極度な不眠症になり、逆に睡眠時間が長くなったりするらしいが、キヨウもそんな状態なのだろうか。

キヨウについて何も知ることができず、モヤモヤとした思いでいるときだった。タクミが突然わけのわからないことを言い出したのは。

「なあ、部活を作ろうぜ」

タクミがこう言い出したのは、昼休みの終わりに弁当を食べているときだった。

「何言い出すんだよ突然」

「いや、やっぱり部活はいいことだと思うんだよ」

タクミは箸をこちらに突き出して言った。先日逃げ出した奴が何を言ってるんだろう。

「部活辞めたばかりだろ」

僕の言葉に、彼はあからさまに嫌そうな顔をした。

「剣道はしたくない」首を左右に振っている。

「でも何かしたいと」

「そつだ」今度は上下に振っている。

「例えば？」僕は惰性で訊いてみた。

「そつだな。とりあえず何か面白くて、かつダラダラとできる活動がいいよな。顧問とかもテキストに頼んでさ。別に来てもらわなく

て大いに結構だから」

僕は言葉に窮したが、タクミが自由にすればいいし、まあ自分には関係のないことなので投げやりな相槌を打った。

「おまえも一緒に作るんだよ」

予想した言葉を一字一句違わずタクミが言ったので、おもわず笑いそうになった。

「絶対言うと思った。何の意味があるんだよ」

タクミは水を一口飲んで、わざとらしい咳払いをした。

「意味の無いことでも何でも、全て自分のためになるような生き方をしろって、ニーチェも言ってるんだぞ」

何故ここでニーチェが登場するんだ。タクミと話しているとわけが分からなくなる。

「ニーチェそんなこと言ったのかよ」

「言ってるさ。言ってるなくても俺が言っただから間違いはない」

「ファシズムだ」

なんとなく思いついたので言ってみた。

「なんだと？ファシズムの意味を知ってるのか」

そう言っていると彼はまた弁当を食べ始めた。物凄くくだらない会話をしているような気がする。

「ヒトラー、ムッソリーニ、東条英機・・・」

「違う、そんなことを言ってるんじゃない。自分が理解できないことを全て端から否定しようとすることをファシズムというんだよ」

話が軌道を変えている。部活云々の話だったはずだ。

「なるほど。それで？」

「部活を作るといって俺の素晴らしい提案が理解できないからって、おまえは全否定しようとする。こういうのはよくないだろ？」

部活云々とファシズム云々を無理矢理繋いでいる。面倒なので賛成しておくことにする。

「確かによくないな。訂正しよう。タクミの部活を作る提案は素晴らしいよ。思う存分好きだけやってくれ」

「いや、だからおまえもするんだって」

話が堂々巡りだ。タクミは飯を食べ終わり、弁当箱を仕舞っている。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。僕はまだ飯を半分ほどしか食べていない。椅子を動かす音が教室に響いている。

「めんどくせー……。具体的に何するんだよ」

「放課後までに考えておく」

タクミはそう言うと立ち上がり、何処かへ行ってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2955w/>

---

僕達は、とりあえず歩く。

2011年8月31日06時00分発行